今月の読み物

# 巨樹・巨木シリーズ17　神奈川県の巨樹・巨木-3

細田木材工業株式会社
顧 問　　細 田 安 治

「懐が深い」というが、「木材やことば」で「この丸太は懐がよい」、「懐がよくできている」というのがある。つまり丸太を組んだ筏にたとえればわかりやすい。ここでいう「懐の良さ」とは、神奈川県を木の分布の広がりとして、筏に置き換えれば、神奈川県は地理的にも懐が深いと言えよう。

神奈川県での巨樹めぐりは三回目となった。巨樹探訪者U氏の後を追い「懐の深い」神奈川県の巨樹を訪ねる。さてどんな木があるやら楽しみだ。

## 中井のエンジュ（槐）

写真番号１

樹齢800年伝承　樹周8.0m　樹高16.0m　足柄上郡中井町雑色郷中225

県指定天然記念物

エンジュとしては日本最大級とも言われている中井のエンジュであるが残念なことに幹や枝の内部に腐食が進んでいる。樹木医により腐食部が削られ金属が当てられ、全体は鉄柱で支えられている。樹勢回復を祈るばかりだ。

〈案内板より〉

県指定天然記念物であり、別名イヌエンジュ（マメ科）。後白河天皇のころ比叡山の僧義円（ぎえん）が地面にさした枝が発芽成長したものと伝えられている。県内のイヌエンジュとしては、他に類を見ない巨木・古木である。かながわ名木百選に選定されている。

〈筆者のつぶやき〉

この木は地中から巨大なザリガニのハサミが突き出ており、つぶつぶの甲羅に見えた。しかもハサミは年月を経て痛めつけられて弱っているように見えるが、「どっこいまだまだ」として青々とした葉を従えている。

エンジュと聞けば、銘木をかじっていたころを思い出す。エンジュは床柱として床の間の「目出度い木」として珍重がられていた。床の間セットの脇床の半地袋の束柱として、チョコレート色に白いコブを浮き出し袴（はかま）をつけて床の間を引き締めていた。その一方、エンジュは女性的な雰囲気を持つ優しい木でもある。

１．中井のエンジュ

## 蓑笠神社のケヤキ

写真番号２

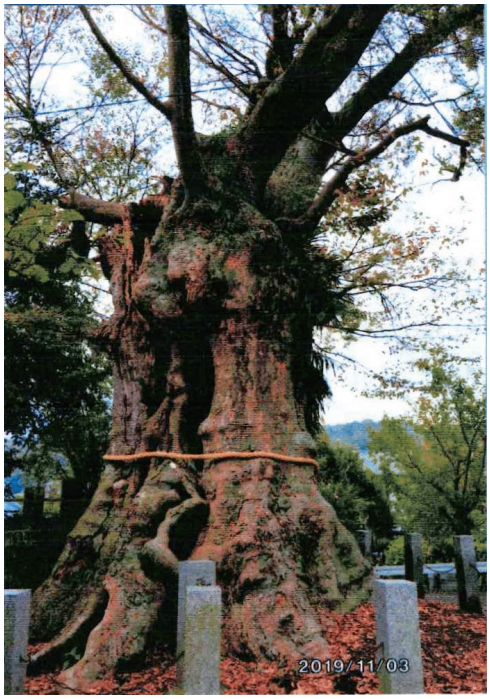
樹齢400年　樹周6.78m　樹高25m　神奈川県足柄上郡中井町井ノ口2039

落雷によって生じた裂傷があるが樹勢は旺盛な古木である。当神社の御神木として崇敬されている。かながわ名木100選に選出。

**〈蓑笠神社の欅昔話　案内板より〉**

「素戔嗚尊と蓑笠神社」

そのむかし、天照大神のいかりにふれて、天上界から追放された素戔嗚尊は、天降ったところが伊勢原の大山（別名雨降山）である。大山から雨のなか蓑と笠をつけた素戔嗚尊は、一夜を井ノ神の社ですごす。　雨もやみ、よい天気になったので尊は、蓑と笠を忘れて置いていった。それ以後、井ノ神の社は「蓑笠神社」と呼ばれ、また祭神として素戔嗚尊をまつるようになった。




２．蓑笠神社のケヤキ

日本書紀には「時に霖なり。素戔嗚尊、青草を結束い、以て笠蓑と為し」とある。「日本書記」にある素戔嗚尊は暴風の神や厄払いの神として信仰され、出雲の国のヤマタノオロチ退治などで知られている。

## 八坂神社の大ムク（大椋）

写真番号３

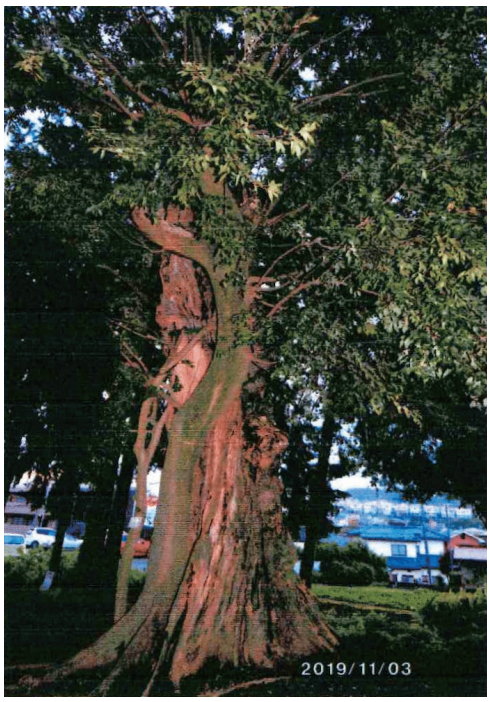
樹齢600年　樹周7.1m　樹高20m　神奈川県秦野市今泉377

秦野市指定天然記念物

ムクノキはアサ科ムクノキ属の落葉高木で、単にムク、またはエノキに似るためムクエノキとも言われている。暖かい沿岸地帯に多く自生し、樹皮が剥けることから「ムク」の名がついたとか、淡緑色の細かい花が咲き果実は甘酸っぱく、ムクドリなどの小鳥が集ることから「ムクノキ」とも呼ばれるようになったとも言われている。ざらついた葉が漆器などの研磨剤に、かたい材は運動具などに利用される。

**〈解説版より〉**

今泉諏訪町の八坂神社のムクは、鶴巻の大ケヤキに次ぐ大きさだ。八坂神社は昔、天王社と称しており、天王社のエノキと呼ばれていたが、実際はムクノキだ。また、天保13（1842）年に記された『新編相模国風土記講』によると、表記の今泉「諏訪町の八坂神社のエノキ」、今泉「峰の八幡神社のエノキ」、今




３．八坂神社の大ムク

泉「細田の権現社のエノキ」とあわせて、「今泉三榎」と呼ばれていたと記載されている。しかし、現存しているものは、表記の八坂神社のもののみである。

**〈筆者のつぶやき〉**

このムクノキは、根元からミドリ色の鱗をつけた大蛇に巻き付かれているように見える。なぜこのようになったか、筆者も初めて見る不思議な現象だ。

今泉の三榎の三番目に「細田の権現社のエノキ」とある。こちらは興味深くぜひとも探索したい巨樹・巨木の一つである。

調べていくと、ムクドリは害鳥のようである。毎度のことながら不確かな知識しかなかった。しかし、巨樹・巨木探究から、次から次へ知識が広がり、やがて想像から創造の世界の扉があく。大きな楽しみである。

## 八幡神社のクスノキ

写真番号４

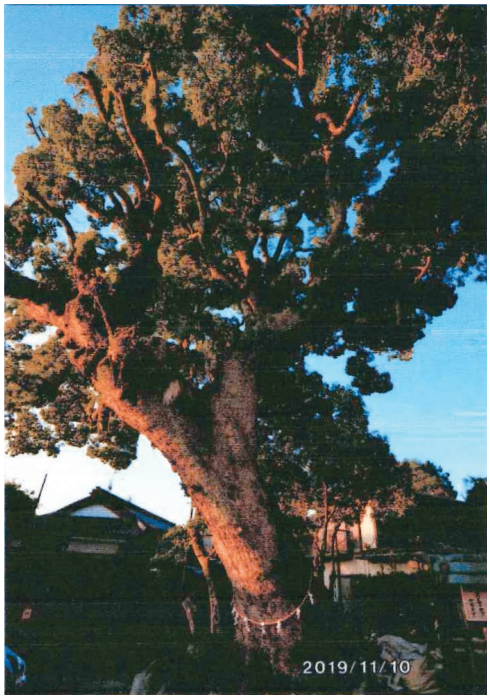
樹齢300年　樹周7.0m　樹高27.0m　足柄上郡山北町山北1301　山北町天然記念物

**〈山北町案内版より〉**

このクスノキは根元の立ち上がりから６ｍほどのところで、幹が大きく二つ割れたように分かれている。しかも分かれた幹は斜めに大きく張り出し、天を覆うほどだ。樹齢300年と表示されており、まだまだ若い木であり、樹勢ますます盛んである。そのうえ根元から出た小枝は、関東大震災の地震で、根元が裂けたところからでたもので、学術的にも貴重なものを持っている巨木である。

**〈筆者のつぶやき〉**

この巨木は、今どきの若者の髪型を想像する樹形である。これはたぶん雄、ヒトにたとえれば30代半ば、まさに血気盛んの年代というべきであろう。




４．八幡神社のクスノキ

## 寄神（やどりき）社の大イチョウ

写真番号５

樹齢500年　樹周6.8m　樹高33.0m　足柄上郡松田町寄2537　かながわ名木100選

寄神社の大イチョウは、鎌倉時代に源頼朝の正室・北条政子の安産祈願のために植えられたとされ、町の文化財に指定されている。

平成25（2013）年の台風26号による強風で倒されたが、地元有志により植え直され見事に蘇り、大イチョウは、青々とした葉を付けた。神社は一安心である。幹に設けられていた「ほこら」も復元され、再びご神体が祭られた。倒壊前から町内外の妊婦らがお参りに訪れていたといい、復元された「ほこら」に

は早速お賽銭が奉納された。

ただ、十分に根付いたかどうかは疑問であるが、しっかり根を張り「地域のシンボル」の地元では「完全に再生できるよう全力を尽くしたい」としている。

〈筆者のつぶやき〉

樹木の植え替えは大変難しい。10本動かせば半分以上枯れると覚悟しなければならない。それも植木屋さんの腕次第だ。植え替えの期間と季節も関係する。大事な木は、２年がかりで移植しなければならない。秋口に水分の吸い上げが止まってから、木の周囲を大きく掘り主根を切らず，枝根を切り、コモでくるんで養生し、もとの穴に埋め込む。この作業が上手下手の分かれ目だ。

5．寄神社の大イチョウ

前号でも述べたとおり、筆者は数本の樹木を千石の自宅から新木場へ移し、さらに一部を新木場の道路に面した緑地帯に移植した。針葉樹は移植に弱い。メタセコイア、黒松、花木として、紅白の梅、桜は意外と強い。ここでことわざの、「桜切る・・、梅切らぬ・・」を経験した。ケヤキも枯れた。イチョウの移植経験はないが、この木は街路樹に使われるほど強い木である。しかも長寿の木であり、簡単に枯れることはないだろう。

そこで寄神社の神木に戻れば、オッとその前に、鎌倉鶴岡八幡宮の有名な大イチョウ、これも台風で倒れ本体の再生はできなかったが、根から芽生えた小さな小枝を大切に育て再生させた成功例がある。鶴岡八幡宮の再生イチョウ成功物語は、本巨樹・巨木シリーズで報告している。この例からも、寄神社の大イチョウ再生物語は成功するのではないか。いや成功すると信じている。

## 筆者のこぼれ話

役所広司さんの映画にも出てきてご存じの方も多いだろうが、幸田　文著「木」について述べたい。平成４(1992)年新潮社より刊行された著作で、いささか古いが、著者の木への想い、山や森で生きている木のすばらしさが、昭和の風情を交えて豊かに描き出されている。また、生々しい木の生きざまなどがわかりやすい文体で述べられている。そしてもっとも大事で、興味深いことは、われわれ木材やが気が付かなかった木の持つ生き方が、鮮明に描かれており、われわれ木材やとは別の視点で木を見ている点である。このようなわけで、今後、稿の進行の中で適宜取り入れご紹介したいと考えている。続く